

19世紀前半のオスマン帝国国境地帯における匪賊-オスマン文書史料から見た「ギリシア人匪賊」の実像-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2011-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 達矢 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/11153

19世紀前半のオスマン帝国国境地帯における匪賊 ——オスマン文書史料から見た「ギリシア人匪賊」の実像——

Bandits in Ottoman Borderlands During the First Half of the 19th century

“Greek bandits” Appearing in Ottoman Documents

博士後期課程 史学専攻 2001年度入学

吉 田 達 矢

YOSHIDA Tatsuya

【論文要旨】

1832年にオスマン帝国とギリシア国家（1833年より王国）の間に国境線が設定され、オスマン帝国側の国境地帯（テッサリアとイピロス地方）では、当初から「ギリシア人匪賊」の行動が活発であり、その根底には「民族闘争（トルコ人あるいはムスリムと、ギリシア人の対立）」的要素があったとされてきた。しかし、匪賊の活動はギリシア国家でも大きな社会問題の一つであった。そこで本稿では、主にオスマン語文書を史料として利用し、「ギリシア人匪賊」の実態について考察した。その結果、

- (1) オスマン帝国の国境地帯で活動していた匪賊は、実際には「ギリシア人」だけでなく、ルム（ギリシア系正教徒）、アルバニア人、ブルガリア人、ヴラヒなど多様な者たちにより構成されていたこと。
- (2) 略奪対象も様々であり、同じ宗教を信仰していたとしても略奪対象となり得たこと。
- (3) 1854年のギリシア軍と「ギリシア人匪賊」のオスマン帝国領への侵攻が、オスマン帝国政府が国境地帯への政策を転換する契機となったこと。

以上の3点を主に指摘することができた。

【キーワード】 国境地帯、匪賊、ギリシア人、ルム、アルバニア人

I. はじめに

1830年にヨーロッパ列強から独立が承認されたギリシア国家（1833年より王国）は、1832年にオスマン帝国政府からも独立が認められ、その領土が画定された⁽¹⁾。当時のギリシア国家とオスマン帝国間の国境線は、テッサリア地方の港湾都市ゴロス（Golos, 現ヴォロス）とイピロス地方の港湾都市ナルダ（Narda, 現アルタ）を結ぶラインであり、そこには東西にのびるオスリス台地と、南北に標高2000メートル級の山々が連なるピンドス山脈があった（地図参照）。このように山岳地帯が国境地帯となったためか、オスマン帝国側の国境地帯となったテッサリア・イピロス両地方では、ギリシア国家の独立当初から匪賊の活動が活発であった。たとえば、19世紀後半に記されたオスマン帝国の年代記では、1854年のギリシア王国とオスマン帝国の紛争（後述）に関する記述において、「かねてよりギリシア王国側から、オスマン帝国との国境を越えて、オスマン帝国臣民に様々な害や悲しみを与え苦しめているギリシア人匪賊」と記している⁽²⁾。さらに近代ギリシアやオスマン帝国、および両国の関係に関する概説書⁽³⁾でも、たびたび国境を越え、オスマン帝国領内で活動した「ギリシア人匪賊」について言及しており、その活動は「民族闘争（トルコ人あるいはムスリムと、ギリシア人の対立）」的要素を帯びていたように記されている。確かに官撰年代記は著者の思想や記された時代の国家政策が反映されやすく、概説書の類も「記述に値する」事件のみを取り扱い、事象を簡潔に記す傾向にある。そのため、これらの記述はオスマン帝国とギリシア王国が常に対立していたような印象を与えている。その根底には民族対立という歴史認識があるように思われる。

ギリシア王国やテッサリア・イピロス両地方で活動していた匪賊については、既に村田⁽⁴⁾やコリオプロス⁽⁵⁾が考察している。彼らによれば、テッサリア・イピロス両地方での匪賊の活動には民族の解放、つまり「オスマン帝国内に住む正教徒をムスリムの支配から解放する」という目的は殆んどなかったようである。ただし、両者の研究ではオスマン帝国側の史料は利用されておらず、1830年以降のオスマン帝国領内における匪賊の活動に関する考察も充分とは言い難い。一方、オスマン帝国史研究では、19世紀前半のこの両地方に関する研究は少なく⁽⁶⁾、1830年以降の両地方における匪賊に関する研究も管見のかぎり皆無である。実際には匪賊の活動は、ギリシア王国側でも19世紀を通じて深刻な社会問題であった⁽⁷⁾。それでは一体、オスマン帝国とギリシア王国間の国境地帯で活動していた匪賊とはどのような者たちであり、彼らの略奪対象・目的は何であったのか。そこで本稿では、1830年以降、両国間の係争の地となったテッサリアとイピロス両地方で活動した匪賊の実態について考察する。そのため本稿では、村田、コリオプロス両氏の研究成果を利用しつつも、主にオスマン帝国側の史料からその実像を考察していく。

なお、ここでいうオスマン帝国側の史料とは、オスマン帝国において公的に作成された史料、つまり公文書、官報、官撰年代記である。そのため、これらの史料では、国家の政策に反対する者や反社会的な行動をとる者たちを全て「匪賊」として一括りにしている恐れがある。たとえば、後述

するテペデレンリ・アリー・パシャは、テッサリア県の長官に任命されるまでは、匪賊とみなされていた⁶⁾。彼のように当初は勢力拡大のために他の「地方勢力（たとえば、アーヤーン）」と武力衝突を繰り返す者であったとしても、いったん強大な権勢を確立したならば、中央政府は官職を与えて支配体制に組み込むことはオスマン帝国ではよく見られる地方支配のやり方であった。つまり、ある時は匪賊と見なされている者でも、中央政府から官職を得ることができれば、容易に体制側になるのである。そのため、匪賊といっても様々な者たちが含まれていると考えられる。本稿では匪賊に関して、とりあえず「暴力をもって攻撃し強奪する人間の集団に属する者」⁹⁾とするが、明確な定義づけは留保し、本稿の考察の中から結論を出していきたい。また本稿での匪賊は、オスマン語の eşkiya, haşarât, haydut, hâ'in, serseri などの訳としてあてた。オスマン公文書史料の中では、殆んど各語の区別はなかったように思われるからである。

あわせてオスマン帝国のギリシア王国との国境に対する政策についても検討したい。19世紀前半におけるオスマン帝国の国境地帯に関しては、ボスニア・ヘルツェゴヴィナについては研究の蓄積があるものの¹⁰⁾、上述のようにギリシア王国との国境地帯については管見のかぎり先行研究が殆んどない¹¹⁾。

19世紀前半におけるオスマン帝国の国境地帯に関する研究は、当時のオスマン帝国の対外意識、「自己」と「他者」の認識を理解することに繋がる。それは同時に「自己」とは何であるか、つまりオスマン帝国政府が自己の領域をどこまでと設定し、自らをどのような「帝国」と規定して、どのような「国家」になろうとしていたのかを考察し、1839年より始まるタンズィマート諸改革がどのような「国家」になるために実施されたのかをめぐる研究に繋がっていくであろう。

考察の時代としては、1830年から1856年までを中心とする。クリミア戦争中の1854年には、ロシアに加担してギリシア側がオスマン帝国領に侵攻するが、短期間で撃退された。その後1855年にはギリシア王国とオスマン帝国間で通商条約が、1856年には国境地帯での匪賊に関する協定が締結される。実際にはこの後も匪賊の活動は両地方において頻発していたが、1856年以後数年間は、それ以前の時期と比べて平穏だったようである¹²⁾。そのため、1856年を一つの区切りとすることが適切と考えた。

なおヒジュラ暦の日付を記す場合は、冒頭に H を置いた。地名については、一般的なものについてはそれに従うが、それ以外のものはトルコ語表記に従った。人名についてはアルファベット表記がトルコ語、[] 内のものをコリオプロスなどの研究中の表記とする。

最後にいくつかの用語について補足すると、ルム (Rum) は、一般的には正教を信仰する者全てを指す言葉とされているが¹³⁾、本稿では「オスマン帝国臣民であり、ギリシア語を母語として正教を信仰する者」、つまり「オスマン帝国臣民であるギリシア系正教徒」とする。後述するように同じ正教徒であっても、ブルガリア人 (Bulgar)¹⁴⁾やヴラヒ (Ulah)¹⁵⁾という別の「帰属集団」としての区別も史料ではなされている場合が多いからである。ルムと史料に記されているが、「帰属集団」が判断できない場合は、単に正教徒、つまり「オスマン帝国臣民で正教を信仰する者」とす

る。ギリシア人はオスマン語の Yunanlı の訳として、本稿では「ギリシア王国の国民で、ギリシア語が母語であり、正教を信仰する者」としておく。「ギリシア人」や「トルコ人」は理念上の「民族」とする。アルバニア人 (Arnavut) に関しては、当時でもその多数がムスリムであったと思われるが、だからといって彼ら全員をムスリムと見なすことはできない。そのため、宗教が特定できる場合は「アルバニア系～」で、できない場合は単にアルバニア人とした。勿論、当時においてブルガリア人やアルバニア人という用語が、現代的な意味での民族だったとは思われない。これらはいくまで本稿における暫定的な訳語や定義であることをあらかじめお断りしておきたい。

II. 1830年までのテッサリア・イピロス地方

1：治安維持

テッサリア・イピロス両地方は、少なくとも16世紀以来、ムスリムが圧倒的に少数の地域で、住民の大多数は非ムスリムであり、ルムの人口が最も多かった⁶⁹。主要街道沿いにはデルベントジ (derbentci)⁷⁰と呼ばれる者たちが治安維持のため配置されていたが、特に山岳地帯ではムスリムが殆んど居住しておらず、諸税の免除と引き換えに武器の携帯を許されて街道の警備や治安維持の任はルムやヴラヒたちに任されていた。彼らはアルマトリ (armatoli)⁷¹と呼ばれ、その長はカプタン (kaputan) と呼ばれていた。アルマトリが何人いたかは時代によって異なっていた。16世紀にはバルカンの山岳地帯でアルマトリの管区は全部で14だったとされるが、一時減少し、後に再び17に増加し、そのうち4つはオリンポス山周辺にあったとされる⁷²。しかし、1740年頃から治安維持の任にはアルマトリに代わり、アルバニア人が採用され始める⁷³。18世紀末にはイピロス地方のヤンヤ (Yanya, 現イオアニンナ) を中心にアルバニア系ムスリムであるテペデレンリ・アリー・パシャの一族の支配が確立し、アルバニア人の影響力が増大する。実際、ギリシア独立戦争 (以下、独立戦争と略記) 期にはテッサリア・イピロス両地方でも正教徒の蜂起が発生したが⁷⁴、それを鎮圧したのはアルバニア人傭兵であった⁷⁵。

2：匪賊の活動

匪賊はギリシア語ではクレフト (複数形はクレフテス) と呼ばれ、匪賊の長もまたカプタンと呼ばれていた。彼らは、時にはアルマトリ、時にはクレフト、つまり状況に応じて立場を変える現実主義者であった⁷⁶。単にオスマン政府の認可 (re'y) がある武装集団がアルマトリで、認可がない武装集団がクレフトであったとさえいえる。アルマトリは「おとなしいクレフト」、本来のクレフトは「野蛮なクレフト」と区別されることもあった⁷⁷。勿論、ルム以外の匪賊もいた⁷⁸。たとえば、18世紀のムスリム匪賊スル・プロショヴァ [Sulu Proshova] の配下の者は数百人に達し、その多くは正教徒であった⁷⁹。ムスリムと正教徒の連帯はこの地域では珍しいことではなく、それは独立戦争期にも見られた⁸⁰。匪賊の多くは移牧民の出身であったとされるが⁸¹、その中には債務者や農村部からの逃亡者もいたという説もある⁸²。匪賊たちはムスリム、キリスト教徒、外国人旅行者を

無差別に襲撃した⁶⁹。

独立戦争で活躍した元匪賊のコロクトロニスの回想録には、彼ら匪賊の気質がよく記されている。たとえば、匪賊やアルマトリの長には、常に勇気と資質がある者が選ばれ、カプタン職は世襲されるが、それは長子ではなく、最も有能な者が受け継いだ。また女性への敬愛が彼らの掟であり、女性を侮辱した者は誰であろうと追放された⁶⁹。

一方、オスマン帝国側の史料では、彼らについてどのように記しているのだろうか。たとえば、H1242 (1827) 年にグレベネ (Grebene, 現グレヴェネ) とクルチョヴァ (Kırçova, 現クルシェヴォ) 間にある村々の非ムスリム (re'âyâ) の多くが、匪賊の被害からトゥルハラ (Tırhala, 現トリカラ) やグレベネやアラソonya (Alasonya, 現エラソナ) に逃亡した。匪賊対策のために政府によって派遣されたスレイマンの所に、認可のある (re'yli) カプタンと認可のない (re'ysiz) カプタン⁶⁹が2人ずつ来て、スレイマンからの認可を求めた。その時の会談の様子は、次のようであった⁶⁹。(引用中の〈 〉は筆者による捕捉である。)

〈スレイマンは〉「テペデレンリ・アリー・パシャの時代には18人のカプタンがジズヤを免除されて、街道や危険な峡谷を守っていた。それらの場所では騒ぎはなかった。今、何人かのカプタンが現れ、ある者の下に300人、ある者の下には200人の異教徒がいる。〈彼らは〉“私はカプタンである、カプタンにつき従っている者である。”と言って、誰もジズヤを支払わない。アーヤーンの下には行かない。法廷には行かない。〈法廷に〉行くとしたら、350人の銃を持つ者たちを連れて行く。このようなカプタンはあり得ない。カプタンとしてお前たちを雇用するつもりはない。私の職務に役立つ者は誰であろうと、その者たちをカプタンにしよう。彼らは私の認可を求めた〈ので〉認可を与えよう。しかし、妻や子供を人質として私に引き渡し、私のチフトリキに住ませる条件で、認可を与えよう。」と言って〈認可を得るためにスレイマンの所に〉来た異教徒たちに返答した。そして、〈スレイマンは〉一枚ずつ認可状を書いて〈カプタンたちに〉送った。

以上のことから、次のことが窺える。すなわち、カプタンが認可を得るには家族を人質として差し出すことが必要であり、彼らは完全に自由ではなく、その地方で勢力を確立しているアーヤーンなどの監視下に置かれていたことである。このことは、トゥルハラ県長官 (mutasarrıf) と、独立戦争に加担しギリシア王国側に逃亡していたカプタンたちの間で取り交わされた1833年6月26日付けの証書 (sened) にも記されている⁶⁹。この史料でも、トゥルハラ県長官はカプタンたちに対し、罪を許し故郷への帰還を許すかわりに、彼らの親族を人質として要求している。ところで、匪賊がどの位の規模の集団であったかは一概には言えない⁶⁹。状況により協力・離反したと考えられるので、上記のように300人以上もあり得たし、数人や数十人の場合もあった。

Ⅲ. 1830年以降の匪賊

1：誰が匪賊か

ギリシア王国では、1833年以降新たな国家の編成にあたって、独立戦争で戦った者たちの殆んどが正規軍には採用されず、多くの者たちが匪賊になったといわれる⁶⁹。ギリシア政府は彼らに対して恩赦や様々な法律を制定して対応する⁶⁹とともに、その一方で、しばしば鎮圧軍を派遣した⁶⁹。しかし、中央集権化をめざす中央政府によって状況は確実に変化し、独立戦争に参加した匪賊は「民族の英雄」、独立戦争後の匪賊は「犯罪者」と評価されるようになった⁶⁹。一方で、オスマン帝国との関係が悪化すると、国境地帯でトラブルを起こすのに利用するために、彼ら匪賊は中央政府に重宝されてもいた⁶⁹。

オスマン帝国でも、独立戦争後は多くのアルバニア人傭兵が解雇された。1830年代、マフムート2世はかねてからの中央集権化政策をアルバニアにも適用するため、その伝統的な自治社会の改革に着手した。そのため1830年には、アルバニア南部の多くの名士がマナストゥル (Manastur, 現ピトラ) に集められて、そこで「虐殺」されたという説もある⁶⁹。この後、アルバニアでは1830年代から70年代にかけて中央集権化政策に反対して、何度か反乱が発生した⁶⁹。

オスマン帝国側の史料を見る限り、H1248 (1832/33) 年頃に国境地帯で活動した匪賊の主な者たちはトスク系アルバニア人 (Toskalk) であった。特にシラフダール・イリヤース・ポテ Silahdâr İlyâs Pote, アブデュル・ベイ Abdül Bey, シャーヒン・ベイ Şâhin Bey, タフィル・ブズ Tafil Buz⁶⁹などの名が史料では散見される。彼らの何人かの名は H1248年以前から史料に現れている。たとえばタフィル・ブズは、テペデレンリ・アリー・パシャのトゥルハラ・ヤンヤ両県の統治時代から有名な匪賊であり、独立戦争時にはオスマン軍の傭兵としてトリポリチェ (Tripoliçe, 現トリポリス) の戦いに従軍していた⁶⁹。またシラフダール・イリヤース・ポテは、テペデレンリ・アリー・パシャに仕えていた⁶⁹。彼らの出自を特定することは困難だが、公文書では彼らの名前に「逃亡者 (firarî)」と付けられていることもある。このことから、彼らの何人かは上記の1830年のマナストゥルにおける「虐殺」から逃亡した名士、あるいは有力者であった可能性は大いに考えられる。彼らはルムの匪賊とも連携し、ムスリムを捕虜とすることもあった⁶⁹。彼らの行動範囲は広く、国境地帯を中心に、時にはアルバニアのベラート (Berat, 現ベラート) や、ギリシア国家の領土を蹂躪し、さらにはクレタ島にまで行った者たちもいた。タフィル・ブズは数千人の仲間を擁していたとも言われる⁶⁹。彼らの活動はアルバニアの騒乱と連動していた。たとえば、1834年に起きたベラート周辺での騒乱には彼らの影響があったようである⁶⁹。彼らの活動は、討伐されたり、あるいは政府側に取り込まれることにより、H1250 (1834/35) 年頃にはほぼ終息する。その後、タフィル・ブズはイスタンブルで、ウスキュダル守備兵 (Üsküdar muhâfızı) の任に就いている⁶⁹。以上のようにオスマン語史料では同じ匪賊とされる者たちの中でも、大規模な人数を率いることができる地方勢力ともいえるような者たちもいたのである。

1840年代からギリシア人匪賊の活動が活発になっていったことも事実のようである。たとえば、H1269-70 (1852-54) 年頃に活動していたギリシア人匪賊の1人として、カラマタ Karamata [Kalamatas] がいる。彼は、時にはギリシア王国内で、時にはオスマン帝国内で略奪を行い、非ムスリムをも襲っていた⁶⁰。1840-50年代に活動していたギリシア人匪賊として他にも、カラタシュ Karataş [Karatasos], パパコスタ Papa Kosta [Papakostas] やヴェレンチェ Velençe [Velentzas] などの名がオスマン公文書で散見される⁶⁰。彼らは1848年にギリシア王国で反乱を起こすが、失敗してオスマン帝国側に避難 (dehâlet) している⁶⁰。ちなみに彼らの反乱にはアルバニア人も数多く参加していたとされる⁶⁰。

H1265 (1848/49) 年にゴロスとエルミエ (Ermiye, 現アルミロス) で捕らえられた匪賊26人の名を記した台帳によれば、その内訳はヴラヒ3人、アルバニア人3人、ブルガリア人2人、アルバニア人・ヴラヒ (Arnavut Ulahi)⁶⁰ 2人、名前から判断してムスリムと思われる者3人、正教徒と思われる者13人であった⁶⁰。このように「帰属集団」名まで記したリストで、現在のところ発見できたのはこれだけなので一概には言えないが、必ずしも匪賊の全てが「ギリシア人」ではなく、様々な集団の者たちがいたことが想定できる。

2：略奪対象

H1269年5月19日から同年9月末日までの間に、トゥルハラ県で匪賊集団 (eşkiya tâifesi) が起こした略奪・殺人の一覧表によれば、各郡で発生した略奪・殺人の件数はそれぞれトゥルハラ郡10件、イエニシェヒル (Yenişehir-i Fenar, 現ラリッサ) 郡30件、チャタルジャ (Çatalca, 現ファルサラ) 郡3件、エルミエ郡4件、ゴロス郡3件であった⁶⁰。この一覧からは、匪賊の活動が国境近くではなく、むしろ国境からより離れた場所で多く起きていたことが推測される。特に半分以上はチフトリキで起き、被害者に関しては殆んどが1人の非ムスリムを狙うものであり、ムスリムが被害者となったのは僅か3件であった。聖職者や女性も被害にあっている。このことから、略奪対象は宗教の相違に基づいてではなく、むしろ単独行動をする者や社会的弱者が狙われやすかったことが分かる。また、殺傷行為には共通点があり、「油で火傷させた後、物品や金を強奪した (yağ ile haşlayıp mal (もしくは akçe) ını ahz eylemiştir)」というものが15件もあった。本稿では、この行為の意味について正確に理解することはできない。しかし、このことは、この地方ではたとえどんな匪賊であったとしても、詳細は不明だが、略奪に際して「共通の慣習」があったことを窺わせる。

他にも、ギリシア人匪賊がルムを略奪する事件も数多くあった⁶⁰。ルムの匪賊がルムを襲うことさえあった⁶⁰。またギリシア側から来たヴラヒの匪賊が、エルミエ近郊でヴラヒを襲ったという事件もみられた⁶⁰。これらの事例からも、その略奪目的が宗教的な対立に基づくものばかりではなかったことが確認できる。

3 : 1854年の紛争

クリミア戦争時に、ギリシア王国はオスマン帝国と国交を断絶し、ギリシア軍と「ギリシア人匪賊」、合計約5000人⁶⁴⁾がトゥルハラ県とヤンヤ県に侵攻した⁶⁵⁾。他にもカラタシュらによる扇動活動により、幾つかの村で反乱が発生した⁶⁶⁾。この時、略奪行為に従事していた「ギリシア人匪賊」の中にアルバニア系ムスリムがいた。逮捕されたこのアルバニア系ムスリムに関する尋問調書によれば、カラタシュの配下500人のうち、ペロポネソス半島出身者は僅かに50人で、残りはブルガリア人、ヴラヒ、バルカンの他の場所から来た者たちであり、彼のほかにもムスリムがもう1人いた⁶⁷⁾。また侵攻してきたギリシア軍の中にアルバニア人が加わっており、それを迎え撃ったのも同じアルバニア人ということもあった⁶⁸⁾。以上のように「ギリシア人匪賊」と見なされた集団は、実はムスリムをも含んだ、出身地や宗教、言語も異なった多様な者たちにより成り立っていたのである。

ところで、この紛争時にヤンヤ県に属するメチョヴァ (Meçova, 現メチョヴァ) という町では、ルムの名士たち (ilerü gelenler) の中からキルヤキ Kiryaki とニコラ Nikola 兄弟がメチョヴァを守るために、侵入してきた「ギリシア人匪賊」と戦った⁶⁹⁾。彼ら兄弟の資産 (emvâl ve eşyâ) は匪賊たちに真っ先に (evvelce) に狙われたことから、詳細は不明だが、彼ら兄弟は相当な資産家であり、有力者であったようである。これらのことから当時の両地方においては、同じ言語や宗教を保持していたとしても、攻撃対象にされる可能性があったことが確認できる。さらには同じ宗教や言語という要素が人々にとって最も優先するものとは限らず、生活基盤がある土地への帰属意識も重要な要素の一つであったことが推測される。そのことを示す1例として、アルバニアに住むアルバニア系正教徒たちは、ペロポネソス半島を中心とするルムによる独立戦争には呼応しなかった⁷⁰⁾。

IV. オスマン帝国の国境守備

ギリシア独立後の国境地帯におけるオスマン帝国側の守備兵に関して、前述のように両地方ではムスリムは圧倒的少数であったので、ムスリムの現地採用は困難であった。そのためオスマン帝国政府に恭順するカプタンとアルバニア人が採用されていた⁷¹⁾。国境の情勢が緊迫すると、隣接する州から兵が派遣されていた⁷²⁾。1830年代には度々アルバニア人や不正規兵 (sekban 'askeri) の無規律とムハンマド常勝軍 ('asâkir-i mansûre) を配置する必要性が上奏されており⁷³⁾、後にタンズィマート諸改革が始まるとデルベント組織は廃止されたといわれている⁷⁴⁾。だが、実際にはデルベント組織はその後にも存続していた⁷⁵⁾。

国境地帯の守備のために、オスマン帝国政府は具体的にいかなる配備をとっていたのか。たとえば1840年代に作成されたと思われるトゥルハラ県において各公職に就く者たちの給与を記した台帳⁷⁶⁾からは、治安維持や財務の任のために雇われた (umûr-u zabtiyye ve mâliyyede müstahdem) 歩兵 (piyâde) 259人と騎兵 (süvâri) 162人、デルベントの警備に就く者 (derbendât muhâfızı)

5247人、正規軍（‘asâkir-i muntazama-ı şâhâne, 人数は不明）がいたことが分かる。また別の史料では、トゥルハラ県で治安維持や財務の任につく歩兵91人と騎兵148人がいる一方で、デルベントジたち（derbentciyân）は5179人と記録されている⁷³。いずれにしても歩兵と騎兵はその人数の少なさから、国境地帯を守るための主兵力ではなく、あくまで治安維持の役割を担わされており、カプタンが率いる武装集団やデルベントジが国境守備の主力だったようである。

1854年にギリシア人の侵攻の討伐を命じられたケチェジザーデ・メフメト・ファト・パシャが中央に宛てた献策書（lâyiha）の写しによれば、国境の守備として最低3000人が必要であるのに、300-500人しかおらず、それも彼らは「トウモロコシの芯で作られた粗末な小屋（mısır koçanlarından yapılmış kulubeler）」に駐在し、一部は「ギリシア人の泥棒（Yunanîlerin hırsızları, オスマン帝国に亡命してきたギリシア人カプタンか?）」であったこと、国内の街道警備として砦（kal’a）にキリスト教徒農民（köylü hıristiyanlar）がそれぞれ3-5人ずつしか常駐していないこと、トゥルハラやヤンヤ県では徴税請負人（mültezim）や治安維持職（subaşı）、大土地所有者（ashâb-ı emlâk）をアルバニア人が占めていたこと、1854年のギリシア人との戦いのさなかにアルバニア人傭兵（başibozuk Arnavut ‘askeri）が住民に略奪していたこと、などが記されている⁷⁴。

以上のことから1854年までのオスマン帝国政府は、ギリシア王国との国境に関して、それが緊急な問題とは考えておらず、1832年にギリシア国家との国境線ができた後も、それ以前からの治安維持体制をほぼ存続させていたといえる。つまり、ギリシア王国との国境地帯であり、住民の多くが正教徒であったにもかかわらず、守備・治安維持の任にはルム、あるいは亡命ギリシア人さえ採用していたことがその証拠となるだろう。この実例は、オスマン帝国側の史料ではよく見られる。たとえば、中央政府からトゥルハラ県長官宛ての通達によれば⁷⁵、あるギリシア人匪賊はトゥルハラ郡で略奪などを行っていたが、彼は以前、かつてトゥルハラ県のデルベントジの隊長（derbent ağası）であったアブデュル・ハリル・アーに仕えていた。またギリシア王国内が騒乱状態になった時には、カプタンたちの多くがオスマン帝国側に来て恭順を示し、国境守備の任務に奉仕（hizmet）する代わりにギリシア側で支払われていた給与と同額の給与が支払われることを要求することもあった⁷⁶。さらにはギリシア側でさまざまな略奪などを行ってきたキルヤコ Kiryako は、オスマン帝国側に来て、アーラファ（Ağrafa, 現アグラファ）の守備隊の書記長（Ağrafa muhâfızı kalem ağa, sic）にギリシア側からの避難や保護を請い、その書記長から保護の許可が与えられた、ということもあった⁷⁷。

ところで、上記のような国境守備の現状を批判したファト・パシャは、今後の対策として、要点をまとめると次のような提案をしている⁷⁸。①トゥルハラ・ヤンヤ両県の事情に精通し改革を実行できる知事が任命されること、②傭兵たちに支払いが滞っていた給与を支払って、彼らを解散させること、③国境守備の任は県内の街道警備とその職務を分離させ、国境守備だけを職務とする部隊を設立すること、④街道警備は治安維持職の者たち（zabtiyye neferâtı）が行うこと、その治安維持職には予備役（‘asâkir-i redife）の者たちやトルコ人の子弟（Türk uşağı）が採用されること、

⑤国境守備の兵士は志願制としてトスク系アルバニア人たちの中で予備役である者たちから徴兵され、国境守備兵 (hudûd muhâfaza 'askeri) の名で3個大隊 (tabûr) が編成されること、⑥兵たちの訓練では、射撃、銃剣を使うこと、ラッパの号令 (boru sesi) で動くようにすることが必要であり、他国では見られない軽装歩兵 (hafif piyâde 'askeri) 部隊が設立されること、⑦国境司令官 (hudûd kumandanı) として准将 (mîrlivâ) がトゥルハラカナルダに駐在し、その部下である大佐 (mîralay) がどちらかの場所に配置され、准将の下で国境守備の任が行なわれること、などである。

つまり国境、及び国境地帯の守備から、旧来これを担っていたカプタンなどの正教徒や、傭兵あるいはデルベントジであったアルバニア人を排除し、主力をトルコ系ムスリムに比重を移し、兵も規律のある近代的なものにして、命令系統も集権的なものにしようとしている。実際、この直後には行政区分の再編や軍事改革も実施された⁶⁹⁾。これらのことから、1854年のギリシア側との戦いが、国境地帯に対する政策を変える契機となったといえるのではないか。またタンズィマート諸改革の理念とその地方社会への浸透が、国境地帯でも目指されていたことが確認できる。

ところで、1856年に国境地帯の匪賊に関してオスマン帝国とギリシア王国間で約定書 (mukavele-nâme) が交わされた。この約定書では、両国の匪賊を追跡する隊 (ta'kîb bölüğü) は、相手国への連絡や協力を怠らず、相手国の町や村に入らないかぎり、互いに匪賊の追跡や逮捕のために国境を越えることが許される、と明記されている⁶⁹⁾。このことから両国において、容易に帰属先を変える匪賊は、中央集権化などの「近代化」や、「国民国家」をめざす中央政府の政策にそぐわない存在として本格的に排除され始めるようになったことが分かる。また、ギリシア王国側に関していえば、この約定書の調印が、それまでの匪賊の活動を利用した「領土拡大政策」の一時的な挫折であると指摘することができるとともに、オスマン帝国との共存を模索する政策に転換しつつあったともいうことができる。つまり、1854年の紛争は、単にテッサリアとイピロス地方の事件ではなく、両国の関係においても重大な転機であった。

V. おわりに

以上考察した結果、19世紀前半におけるオスマン帝国とギリシア王国間の国境地帯は、「ムスリム (トルコ人)」と「ギリシア人」の闘争という単純な二項対立関係から成り立っていたわけではなく、そこにアルバニア人、ヴラヒ、ブルガリア人という者たちも加わった、遥かに複雑で多様な社会であり、本稿ではその一端を窺い知ることができたように思う。特に19世紀前半のバルカン社会におけるアルバニア人の存在については、さらに注目されるべきであろう。先に検討したようにオスマン政府は、国境地帯の守備に関して、その弊害は承知していても、アルバニア人を完全には排除できなかつたのである。また19世紀半ばのギリシア王国では、人口の5分の1がアルバニア人だったといわれる⁶⁹⁾。国境地帯における匪賊の活動も1830年代前半ではアルバニア人が目立っていた。オスマン帝国国境地帯における匪賊は、「ギリシア人」ばかりではなく、時代により匪賊

となる者は異なっていたのである。さらに、史料では同じ匪賊集団とされている者たちの中にも、上述したトスク系アルバニア人のように大規模な集団や、数人単位の者たちまで、様々な者たちが含まれていた。

またテッサリア地方ではかねてからチフトリキが数多く見られた⁶⁹。広大な土地の所有を権力基盤の一つとして地方社会を支配していたアーヤーンと匪賊の関係については、本稿では十分に考察することができなかった。移牧民との関係も重要であろう。本稿ではテッサリアとイピロス地方の匪賊の側面を述べたに過ぎない。本文中でも言及したように、本稿で利用した史料において匪賊とされている者たちの中には、在地の名士と思われる者たちも含まれていたようである。したがって、社会経済的な側面からもこの地域社会の実態を考察していくことが必要であることは言うまでもない。また、今回利用できたのは殆んどオスマン帝国側の「公的な」史料であった。民衆や匪賊自らが記した史料、あるいはその利用には注意を要するが民間伝承やバラードなどからは、「義賊」としての匪賊像も明らかにできる可能性もある。より多角的に考察していくことが今後の課題である。

両地方における匪賊の活動は、宗教闘争という側面は皆無ではないとしても、きわめてその要素は少なかったことが、オスマン帝国側の史料に基づいた考察からも確認できた。「ギリシア人匪賊」の中にアルバニア系ムスリムが加わっており、また略奪対象が様々だったことも、その証左となるだろう。カプタンは、匪賊の長であると同時に、治安を維持する武装集団の隊長でもあった。彼らは状況に応じて国境を越え、帰順先も容易に変えていた。19世紀前半のテッサリア・イピロス両地方では、国家への帰属意識が曖昧であり、社会的・経済的な利益が優先的に考えられていたことが推測できる。それは両国家の政府も同様であり、かつては敵であったとしても恭順を示した者たちを安易に治安維持や国境警備の任に採用していた。少なくともオスマン政府側は、ギリシア国家独立以前からの治安維持組織を、ギリシア国家独立後もほぼ維持していた⁷⁰。つまり1854年までは、オスマン帝国側では、ギリシア王国を「民族国家（キリスト教徒、もしくはギリシア民族の国家）」とはみなしておらず、注視はしていたものの、危険視や敵視はしていなかったと考えることができる。実際、国境地帯に関する詳細な地図は、1855年までは作成されなかった⁷¹。

これらのことから、1854年におけるギリシア側のオスマン帝国領への侵攻の際、殆んど正教徒がともに蜂起せず、大規模な騒擾にはならなかった理由が推定できる。つまり、かねてよりギリシア人匪賊の略奪行為が常態であったため、正教徒たちのあいだではギリシア人に対して同じ「民族」という連帯感は希薄であった。「民族意識」よりも生地への執着、「郷土愛」が優先していたと思われる。このことを実証するために、ギリシア側からのオスマン帝国内の正教徒への扇動活動の実態とその効果を明らかにすることが次の課題となる。実際にはこの後も匪賊の活動が沈静することとはなく、同時にギリシア人たちの扇動活動も続いていた。1856年以降の時期については、別稿で改めて論じたい。

○史料略号一覧

総理府オスマン古文書館 (Başbakanlık Osmanlı Arşivi) 所蔵

AFT: Ali Fuat Türkgeldi Evrakı

C-Zaptiye: Cevdet Tasnifi Zaptiye

HR. MKT: Hâriciye Nezâreti Mektubi Kalemî Belgeleri

HH: Hatt-ı Hümâyûn

İ-Dahiliye: İrâde Dahiliye

İ-Mesâ'il-i Mühimme: İrâde Mesâ'il-i Mühimme

İ-Meclis-i Vâlâ: İrâde Meclis-i Vâlâ

İ-Yunanistan: İrâde Yunanistan

官報

TV: *Takvîm-i Vekâyi'*

官撰年代記

TL: Ahmed Lütî Efendi, *Tarih-i Lütî*, vol. 1-8, İstanbul, H1290-1328.

Ahmed Lütî Efendi (M. Münir Aktepe. ed.), *Vak'a-nüvis Ahmed Lütî Efendi Tarihi*, vol. 9, İstanbul, 1984.

注

- (1) 正確な国境線については、TL, vol. 4, pp. 193-197; *Mu'âhedât Mecmu'ası*, vol. 2, İstanbul, H1294, pp. 272-277を参照。
- (2) 該当する箇所のおスマン語は次のとおり。「hayli zamandan berü Yunanistan tarafından Devlet-i aliyye hudûdunu tecâvüz ile teb'a-i Devlet-i aliyye'ye envâ' zarar ve esefe düçâr eden haşarât-ı Yunâniyye」(TL, vol. 9, pp. 102-103.)
- (3) たとえば、Enver Ziya Karal, *Osmanlı Tarihi*, vol. 6, Ankara, 1954, pp. 82-83; Douglas Dakin, *The Unification of Greece 1770-1923*, London, 1972, p. 73; C. M ウッドハウス (西村六郎訳), 『近代ギリシャ史』, みすず書房, 1997, 212頁など。
- (4) 村田奈々子「ギリシア独立戦争と匪賊クレフテスーコロコトロニスに見る「地域」と「国家」」, 歴史学研究会編, 『地中海世界史 5 社会的結合と民衆運動』, 青木書店, 1999, 283-315頁。
- (5) John S. Koliopoulos, *Brigands with a Cause: Brigandages and Irredentism in Modern Greece 1821-1912*, Oxford, 1987; “Brigandage and Irredentism in Nineteenth-Century Greece”.; Martin Blinhorst and Thanos Veremis (eds.), *Modern Greece: Nationalism & Nationality*, Athens, 1990, pp. 67-102; “Brigandage and Insurgency in the Greek Domains of the Ottoman Empire, 1853-1908”: Dimitri Gondicas and Charles Issawi (eds.), *Ottoman Greeks in the Age of Nationalism*, Princeton and New Jersey, 1999, pp. 143-160.
- (6) テッサリア地方に関しては、Richard I. Lawless, “The Economy and Landscapes of Thessaly During Ottoman Rule”: Francis W. Carter (ed.), *An Historical Geography of The Balkans*, London, 1977, pp. 501-533. イピロス地方に関しては、Ihalis Kokolakis, “The Later Pashalik of Yannia (Yanya): Topography, Administration and Population in Ottoman Epiros (1820-1914)”, *Tarih Araştırma Dergisi*, 16/27 (1994), pp. 125-132; Mehmet Gökaçtı, “Geçmişten Günümüze Yanya”, *Tarih ve Toplum*, 181 (1999), pp. 31-43などを参照。
- (7) たとえば、リチャード・クロウグ (高久暁 訳), 『ギリシャ近現代史』, 評論社, 1998, 57, 93頁。
- (8) テッサリア地方で権力を確立するまでのテペデレンリ・アリー・パシヤの活動については、Dennis N. Skio-

- tis, “From Bandit to Pasha: First Steps in the Rise to Power of Ali Tepelen, 1750–1784”, *IJMES*, vol. 2 (1971), pp. 219–244を参照。
- (9) E. J. ホブズボーム (斎藤三郎 訳), 『匪賊の社会史』, みすず書房, 1972, 1頁。
- (10) たとえば, Ahmet Cevat Eren, *Mahmud II. Zamanında Bosna-Hersek*, İstanbul, 1965 ; 江川ひかり「タンジーマート改革期のボスニア・ヘルツェゴヴィナ」, 『岩波講座世界歴史21: イスラーム世界とアフリカ』, 岩波書店, 1998, 119–140頁 ; Menad Moaçanin, “Some Observations on the “kapudans” in the Ottoman North-Western Frontier area 16–18c”: Markus Köhbach, Gisela Procházka, and Claudia Römer (eds.), *Acta Viennensia Ottomanica: Akten des 13. CIEPO-Symposiums vom 21. bis 25. September 1998 in Wien*, Wien, 1999, pp. 241–246. さらに詳しくは次の文献目録を参照。T. C. Başbakanlık Devlet Arşivleri Genel Müdürlüğü Dokümantasyon Daire Başkanlığı, *Bosna-Hersek Bibliyografyası*, vol. 1–2, Ankara, 1995.
- (11) 最近刊行された次の論文集にもギリシア王国との国境地帯に関する論文はない。Kemal H. Karpat and Robert W. Zens (eds.), *Ottoman Borderlands: Issues, Personalities, and Political Changes*, Madison, 2003.
- (12) George Finlay (H. F. Tozer. ed.), *A History of Greece*, vol. VII, New York, 1970 (first edition, Oxford, 1870), pp. 227–228. また H1274年にはギリシア国王が国境地帯を訪れ, トゥルハラ県の知事や役人たちと会見している。(İ-Yunanistan340)
- (13) たとえば鈴木氏は,「オスマン帝国支配下の非ムスリム臣民の処遇の制度としてのズィンミー制度のもとで, 正教会に属する人々は, 民族と言語を問わず一括して正教徒として扱われた。それゆえ, 一括して広義のルーム(正教徒)として扱われる人々のなかには, 言語とエスニシティの面でみると, ギリシア語を母語とするギリシア人, ブルガリア語を母語とするブルガリア人, セルビア語を母語とするセルビア人, ルーマニア語を母語とするルーマニア人, アルバニア語を母語とするアルバニア人から, アラビア語を母語とする者, さらにはトルコ語を母語とするカラマンルと呼ばれる人々まで, ささまざまな人々が含まれていた。そして, これらの人々は, なによりもキリスト教徒, そのなかでも正教徒という意識を有しつつも, 多くの場合, 母語をよりどころとしてエスニックな民族も第二次的な意識としては有していた。」と述べている。(鈴木 董「第五章 オスマン帝国時代」, 桜井万里子(編)『新版世界各国史17 ギリシア史』, 山川出版社, 2005, 239頁。)
- (14) 佐原徹哉, 『近代バルカン都市社会史—多元主義空間における宗教とエスニシティ』, 刀水書房, 2003, 219頁では, 「マケドニアとブルガリアではスラヴ系の住民は一律に「ブルガリア人」と見なされていた」と記されている。そのため本稿におけるブルガリア人の中に, ブルガリア人以外のスラヴ系の者たちも含まれていた可能性は十分に考えられる。
- (15) ヴラヒは本稿ではとりあえず, 「アルーマニア語(または, ヴラヒ語)と呼ばれるルーマニア語に近いロマンス語系の言語を話す牧畜民」とする。より詳しくは, 萩原 直「アルーマニア」, 伊藤孝之・直野敦・萩原直・南塚信吾・柴宣弘(監修), 『東欧を知る事典(新訂増補)』, 平凡社, 2001, 17–18頁 ; 戸谷 浩「ブラフ」, 同書, 438–439頁などを参照。
- (16) 当時のテッサリア地方の人口については, 拙稿「19世紀前半におけるオスマン帝国とギリシア王国間の人々の移動と帰属意識—テッサリア地方の事例を中心に—」, 『日本中東学会年報』, 20–2 (2005), pp. 249–250, イピロス地方の人口については, Gökaçtı, *op. cit.*, などを参照。
- (17) デルベント組織に関しては, Cengiz Orhonlu, *Osmanlı İmparatorluğu'nda Derbend Teşkilâtı*, İstanbul, 1990 (2nd ed) を参照。またデルベントジとはほぼ同義と思われるマルトロス (Martolos) に関しては, Milan Vasić (Kemal Beydilli. tr.), “Osmanlı İmparatorluğunda Martoloslar”, *Tarih Dergisi*, 31 (1977), pp. 47–64を参照。
- (18) アルマトリに関してはとりあえず, Finlay, *op. cit.*, vol. VI, pp. 19–23; Dennis N. Skiotis, “Mountain Warriors and Greek Revolution”, V. J. Parry and M. E. Yapp (eds.), *War, Technology and Society in the Middle East*, London, 1975, pp. 308–329を参照。
- (19) John C. Vasdravellis (Phonteine P. Bourboulis. tr.), *The Greek Struggle for Independence: The Macedonians in the Revolution of 1821*, Thessaloniki, 1968, p. 3. ちなみにアラソンヤやオリンポス山周辺は匪賊の避難場所でもあった。(HH22018, 5. Cemâziyü'l-evvel. H1252)

- (20) Finlay, *op. cit.*, vol. VI, p. 20; Orhonlu, *op. cit.*, p. 141; Skiotis, *op. cit.*, p. 315.
- (21) たとえば, Şânîzâde Mehmed 'Atâ'ullâh Efendi, *Tarih-i Şânîzâde*, vol. 4, İstanbul, nondate, p. 206; Yusuf Halaçoğlu, "Teselya Yenişehir ve Türk Eserleri Hakkında bir Araştırma", *Güney-Doğu Avrupa Araştırmaları Dergisi*, 2-3 (1974), pp. 89-100; 村田奈々子「第六章 近代のギリシア」, 『新版世界各国史17 ギリシア史』, 279頁。
- (22) 独立戦争の鎮圧にアルバニア人が有力な兵力として重用されていたことは, 以下の年代記の記述からも窺える。Sahhâflar Şeyhi-zâde Seyyid Mehmed Es'ad Efendi (Ziya Yılmaz. ed.), *Vak'a-Nüvis Es'ad Efendi Tarihi (Bâhir Efendi'nin Zeyl ve İlâveleriyle): 1237-1241/1821-1826*, İstanbul, 2000; Şânîzâde, *op. cit.*, vol. 4; Ahmed Cevdet Paşa, *Tarih-i Cevdet*, vol. 12, İstanbul, H1309. また1770年のペロポネソス半島における反乱の討伐においても, アルバニア人傭兵団が鎮圧にあたった。永田 雄三「トルコ語史料よりみたる1770年におけるモレア半島のギリシア人反乱」, 『史学雑誌』, 第80編第7号 (1971), 60頁。他にも Aziz Berker, "Mora İhtilâli Tarihçesi veya Penah Ef. Mecmuası 1769", *Tarih Vesikaları*, vol. II, no. 7-12 (1942-43) を参照。
- (23) 村田 (1999), 292頁。
- (24) 南塚信吾, 『アウトローの世界史』, 日本放送出版協会, 1999, 113-114頁。
- (25) 1821年以前における匪賊の活動の事例としては, Ahmed Câvid (Adnan Baycar. ed.), *Hadîka-i Vekayi'*, Ankara, 1998, p. 43: C-Zaptiye240, 276, 287などを参照。
- (26) Finlay, *op. cit.*, vol. VI, p. 23. 他にも匪賊としてムスリムとルムが行動を供にしていた例は幾つかある。たとえば, C-Zaptiye1163.
- (27) 独立戦争期におけるムスリムとルムの連携については, John A. Petropoulos, "Forms of Collaboration with the Enemy during the First Greek War of Liberation", Nikiforos P. Diamandouros, John P. Anton, John A. Petropoulos, and Peter Topping (eds.), *Hellenism and the First Greek War of Liberation (1821-1830): Continuity and Change*, Thessaloniki, 1976, pp. 131-143を参照。またマクリヤンニスの回想録でも, 彼らルムがアルバニア人と連携して「トルコ人」と戦ったことに言及している。H. A. Lidderdale (ed. and trans, C. W. Woodhouse. foreword.), *Makriyannis: the Memoirs of General Makriyannis 1797-1864*, London, 1966, *passim*.
- (28) 村田 (1999), 287頁。
- (29) Koliopoulos (1999), p. 144.
- (30) 村田 (1999), 286頁。
- (31) Richard Clogg (ed, trans and intro.), *The Movement for Greek Independence 1770-1821: A collection of documents*, London, 1976, p. 173 (英訳が一部掲載されている。) コロクトロニスの生涯については, 村田 (1999) を参照。
- (32) この認可のあるカプタンと認可のないカプタンは, 秘密裏に共謀して非ムスリムを襲っていた, とされる。(HH21184/B, 4. Zi'l-ka'de. H1242)
- (33) 該当する箇所のオスマン語は次のとおり。「Tepedelenli 'Ali Paşa'nın zamânında fakat on sekiz nefer kapudan cizyeden mu'âf olarak yolları ve mahûf olan derbendleri muhâfaza edüb bir yerde çıt olmaz idi şimdi bir tâkım kapudanlar peydâ olub kiminin başında üç yüz ve kiminin başında iki yüz gâvur var ben kapudanım ben kapudanın yanındayım diyerek birisi cizye virmez ve a'yânın yanına gitmez ve mahkemeye varmaz ve mahkemeye gitse üç yüz elli tüfenkli ile gider böyle kapudanlık olmaz hem kapudanlıkda sizi istihdâm edecek değilim benim işime yarayacak kim ise anları kapudan edeceğim ama bunlar benden re'y istemişler re'y viririm lakin karılarını ve çocuklarını rehın olarak bana teslim ederler ben de çiftliklerimde iskân ederek böylece re'y viririm deyü gelen gâvurlara cevâb virmiş ve birer kâğıd dahî yazmış göndermiş oldığı」(*Ibid.*)
- (34) HH32891/C (H1249).
- (35) 萩原氏は「たいてい10~80人程度」としているが(萩原 直「ハイドック」, 『東欧を知る事典(新訂増補)』, 360頁.), 村田氏は「家族単位の小規模なものから, 数百, 数千にもおよぶものがあったというから(以下, 省略)」, と述べている。(村田 (1999), 291頁.)

- (36) クローグ、前掲書、57頁。軍隊の再編成により、独立戦争の戦士約1万人が生活の糧を奪われたとされる。(ニコス・スポロノス(西村六郎 訳)、『近代ギリシア史』、白水社(文庫クセジュ)、1988、54頁。)またコロオプロスは、断片的な情報と断りながらも、ギリシア軍に元匪賊や反乱者が採用されたが、記録があり出身が分かる90人のうち61人がオスマン帝国領出身であり、特にエピロス地方出身者が多かったことを指摘している。(Koliopoulos (1987), pp. 91-92.)
- (37) たとえば、1834年には刑法で略奪は犯罪であることが正式に規定され、それに対する罰則も定められた。一方で、独立戦争で活躍したクレフトには、軍隊での名誉職や、有利な条件で土地が分配されることもあった。村田(1999)、311頁。
- (38) たとえば、İ-Yunanistan190. lef2 (H1267), HR. MKT24/58. lef6 (4. Rebi'yü'l-ahr. H1265).
- (39) 村田(1999)、311頁。
- (40) クローグ、前掲書、93頁。
- (41) Stavro Skendi, *The Albanian National Awakening 1878-1912*, Princeton and New Jersey, 1967, p. 23.
- (42) 下浜 啓子「アルバニアの独立運動に関する一考察」、『東欧史研究』、第4号(1981)、52頁。
- (43) 彼の名は、オスマン語の各史料において表記が異なる。例えば、TL, vol. 4, p. 168 では طفلبوز, 一方、Petrika Thëhgjilli (ed.), *Kryengritjet Population Ne Vitet 30 Te Shelillit XIX (Documente Osmane)*, Tiranë, 1978所収のHH では、بوز طفيل بوز, طافل بوزなどと表記されている。アルファベットにおいても表記は様々であり、本稿では Thëhgjilli の表記に従った。
- (44) HH21460/B (13. Safer. H1249).
- (45) TL, vol. 2, p. 68: Süleyman Külçe, *Osmanlı Tarihinde Arnavutluk*, İzmir, 1944, p. 189.
- (46) HH21703/C (18. Zi'l-ka'de. H1248, Thëhgjilli, *op. cit.*, に所収), 21680/A・B (12. Şevvâl. H1248, 共に Thëhgjilli, *op. cit.*, に所収)。
- (47) HH21735/C (5. Rebi'yü'l-evvel H1248), 22125 (Şevvâl. H1248, Thëhgjilli, *op. cit.*, に所収)。
- (48) HH21500 (Muharrem. H1251, Thëhgjilli, *op. cit.*, に所収)。
- (49) TL, vol. 4, p. 168.
- (50) たとえば, *Cerîde-i Havâdis* 647 (Selh. Zi'l-hicce. H1269) p. 1, İ-Yunanistan206. lef2 (9. Cemâziyü'l-ahr. H269), 215. lef1 (17. Cemâziyü'l-evvel. H1269)。
- (51) 彼らは遅くとも1830年代半ばにはギリシア王国内でカプタンとして活動していた。Koliopoulos (1987), *passim*.
- (52) *Ibid.*, p. 126. さらに, İ-Yunanistan128.lef9 (pusula, 書付け)によれば, binbaşı (少佐)であった Yani Velence [Ioannis Velentzes] は22人, 同じく binbaşıであった Papa Kosta [Papa Kosta] は37人, kolağası (少佐の副官)であった Balaço [Balatsos] は57人, 同じく kolağasıであった(人名判読不能)は15人, 同じく kolağasıの Kondro [Kontogiannis か?] は29人の配下の者たちとともにオスマン帝国側に避難してきた, とある。
- (53) İ-Mesâ'il-i Mühimme889. lef2 (1848. 4. 28付けの駐アテネ・オスマン大使からの報告の訳)。
- (54) Koliopoulos (1987), p. 22によれば, ヴラヒ語とギリシア語に加え, アルバニア語も話す者たち。
- (55) HR. MKT28/24 (日付なし)。
- (56) İ-Yunanistan224. lef5 (日付なし)。
- (57) たとえば, *Cerîde-i Havâdis* 47 (26. Cemâziyü'l-ahr. H1257) pp. 1-2, İ-Dahiliye5262 (H1260), HR. MKT54 /38. lef2 (11. Rebi'yü'l-evvel. H1269)。
- (58) たとえば, İ-Meclis-i Vâlâ13417, TV480 (26. Rebi'yü'l-evvel. H1269) p. 2.
- (59) HR. MKT4/51 (17. Rebi'yü'l-ahr. H1269)
- (60) この数は一定していない。たとえば, TV505 (18. Ramazan. H1270) p. 2 では, ギリシア軍司令官が約5000人の匪賊と共にナルダ近郊を攻撃した, とある。また İ-Yunanistan219. lef3 (14. Muharrem. H1270) では, ナルダ郡を攻撃する2000人のギリシア人, としている。他にも D. ジョルジェヴィチ・S. フィシャー・ガラティ(佐原徹哉 訳), 『バルカン近代史: ナショナリズムと革命』, 刀水書房, 1994, 122頁では, 「ギリシャの正規軍の将校の指揮下に, 一八五三年から五四年の冬に約七千人程がイピロスとテッサリアに派遣さ

れた。」と述べられている。

- (61) ギリシア側のオスマン帝国領への侵攻から、オスマン軍に撃退されるまでの経緯については、とりあえず TV503 (20. Receb. H1270)-507 (Selh. Şevvâl. H1270) を参照。
- (62) İ-Dahiliye19014, 他にも Koliopoulos (1987)・(1999), *passim*.
- (63) İ-Meclis-i Vâlâ12874 (21. Şa'ban. H1270).
- (64) İ-Yunanistan240. lef1 (1854年2月25日付けのシラ (Şira, 現シロス) 島駐在のオスマン領事からの報告の訳)。他にもナルダでギリシア人匪賊を撃退したアルバニア人兵が、今度は彼らが家屋、店舗、教会、修道院などを襲撃したことが報告されている。AFT2/42 (9. Ramazân. H1270).
- (65) İ-Meclis-i Vâlâ14263.
- (66) Stavro Skendi, "The Millet System and Its Contribution to the Blurring of Orthodox National Identity in Albania", Benjamin Braude and Bernald Lewis (eds.), *Christians and Jews in the Ottoman Empire*, vol. 1, New York, 1982, p. 248.
- (67) たとえば、前述のタフィル・ブズはトゥルハラ県長官に恭順を示すと、一時アーラファとドメケ (Dömeke, 現ドモコス) のデルベントの長の職 (derbent ağalığı) が与えられた。(HH21715/A, H1248. HH21715/B, 5. Cemâziyü'l-ahır. H1248) .
- (68) たとえば、イエニシェヒルに常備軍がいなかったため、ヤンヤ, デルヴィネ (Delvine, 現デルヴィネ), アヴロンヤ (Avlonya, 現ヴロア) 各県の長官を兼ねていたエミン・パシャの管轄下から援軍が派遣されている。(HH21681, 14. Şevvâl. H1248, Thëhgjilli, *op. cit.*, に所収) 1843年にルメリ軍が設立された後は、非常時には、駐屯地であるマナストゥルより援軍が派遣されたと思われる。その1例として TV526 (29. Ramazân. H1271) p. 1 を参照。
- (69) HH21521 (13. Safer. H1249).
- (70) Orhonlu, *op. cit.*, p. 155.
- (71) Atatürk Kitaplığı, Muallim Cevdet Evrakı33.42.
- (72) *Ibid.*, fol. 3a-4a.
- (73) C-Zaptiye2372 (4. Muharrem. H1260).
- (74) AFT9/63: Ali Fuat Türkgeldi (Bekir Sıtkı Baykal. ed.), *Mesâil-i Mühimme-i Siyâsiyye*, vol. 3, Ankara, 1966, pp. 111-112.
- (75) HR. MKT15/60 (10. Muharrem. H1263).
- (76) İ-Yunanistan122. lef5 (Zi'l-ka'de. H1263).
- (77) HR. MKT98/33. lef1 (日付なし), 3 (13. Rebi'yü'l-ahır. H1271).
- (78) AFT9/63: Türkgeldi, *op. cit.*, pp. 113-114.
- (79) TV538 (7. Cemâziyü'l-ahır. H1272) p. 1, 542 (8. Şevvâl. H1272) p. 1. また *Sâlnâme-i Devlet-i 'Alîyye-i 'Osmaniyye*, vol. 12 (H1274), p. 66によれば、プレヴェゼ (Preveze, 現プレヴェゼ), ナルダ, ゴロスにそれぞれ歩兵1大隊, イェニシェヒルには歩兵2大隊と騎兵1連隊, イェニシェヒルとギリシア国境にコサック (kazak) 騎兵が配置されていた。
- (80) 約定書に関しては, *Mu'âhedât Mecmu'ası*, vol. 2, pp. 292-295を参照。
- (81) Finlay, *op. cit.*, vol. 6, p. 35.
- (82) Halil İnalçık, "Çiftlik", *İA*, vol. 3, p. 395.
- (83) Koliopoulos (1987), p. 318.
- (84) Cevdet Paşa (Cavid Baysun. ed.), *Tezâkir 1-2*, Ankara, 1953, p. 51.



本稿関係地図

Bandits in Ottoman Borderlands During the First Half of the 19th century: “Greek bandits” Appearing in Ottoman Documents

YOSHIDA Tatsuya

After independence of the modern Greek state (which in 1833 became a kingdom) was approved in 1830, borderlines were established between it and the Ottoman Empire in 1832. From that time on, so-called “Greek bandits” were considered to have become active in the Ottoman borderlands. It has been the general belief to date that this “bandit” activity was one aspect of ethnic strife between Greeks and Turks. However, in reality such activity also posed a big problem for the Greek state. There has been research on the subject, but unfortunately it has been conducted without referring to the Ottoman documentation. In addition, this research has not considered the issue of the Ottoman borderlands sufficiently. This article examines the actual activities of bandits in the Thessaly and Epirus regions in relation to the borderland policies of the Ottoman Empire, using the Ottoman documents.

First, the author focuses on the public safety system in relation to the Thessaly-Epirus bandits up to 1830. Since the majority of the population of both regions was non-Muslim, the main security force there was made up of armed groups of Rums (Greek Orthodox) which had received Ottoman Government approval to combat Rum banditry since the 16th century. However, according to the author, from 1740, on Albanian (Muslim) bandits entered the region, and the two groups frequently banded together, despite their religious differences, but their respective targets were different.

Second, as to banditry in the region after 1830, the author points out that the activity of Tosco-Albanian bandits was particularly vigorous during the early 1830s, and also confirms from the Ottoman documentation that the bandits active there were not only Rums and Muslims, but also Bulgarians and Vlachs, and their targets were not only Muslims.

In 1854, the Greek army enlisted the bandits in its invasion of Ottoman territory. However, since Albanian Muslims were included in the category of “Greek bandits” and there are cases in which Rums resisted the “Greek bandits”, neither varying religion nor languages was always a determining factor in their relationships. For the people of that region, adherence to their homeland was also an important factor in their relationships. Finally, the author confirms that the 1854 invasion of the Greek army-bandit coalition brought about a change in Ottoman Government policy concerning its borderlands.